

會圖託平太

二

伊 1830

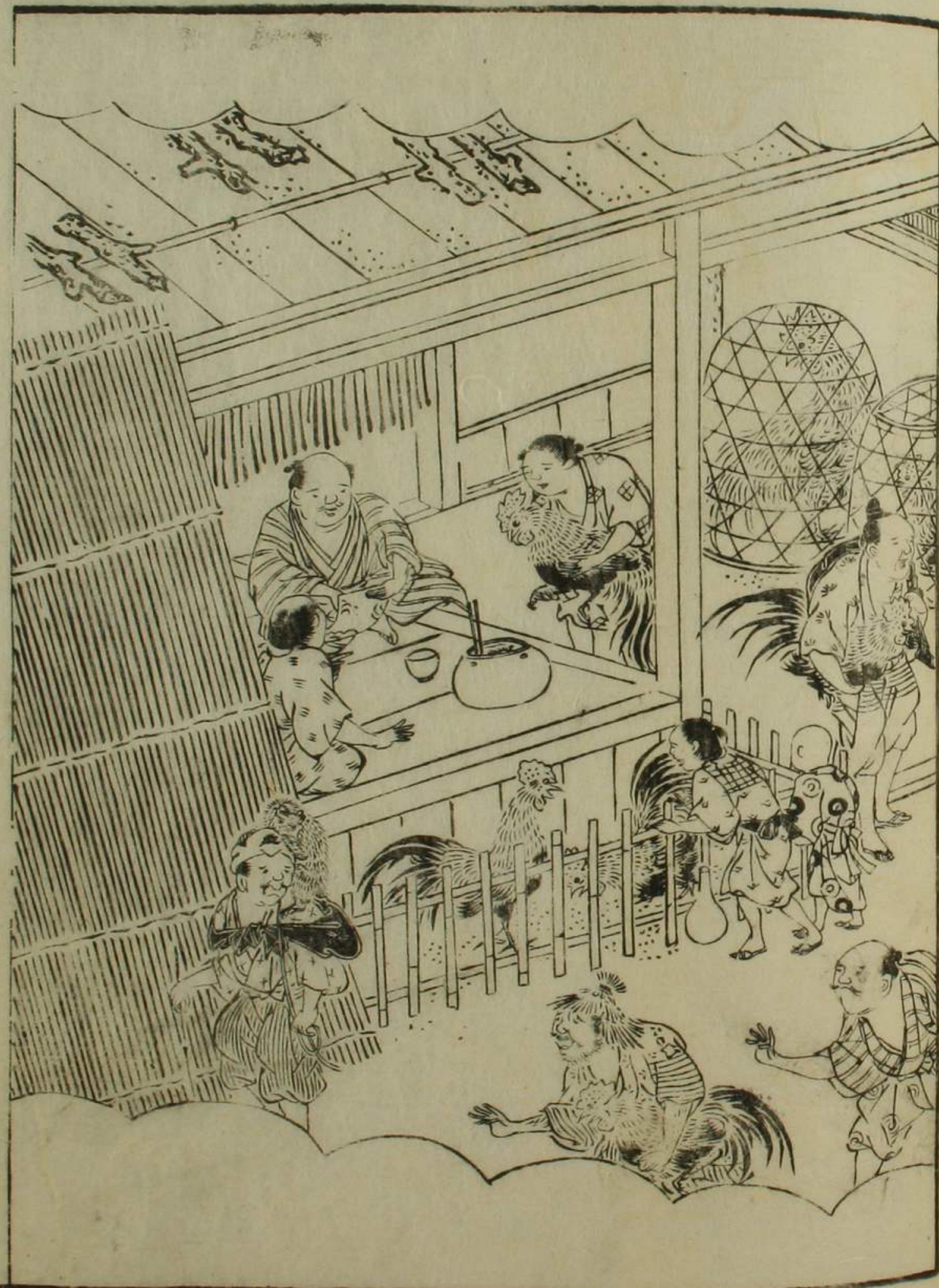


儒業と事と強ふに今又山川を平定せしむ海の凶賊と一時に改めしむ
け強ひしむ世平く其威と治れ其徳と林いふ

治大地震彗星見弄箇雜

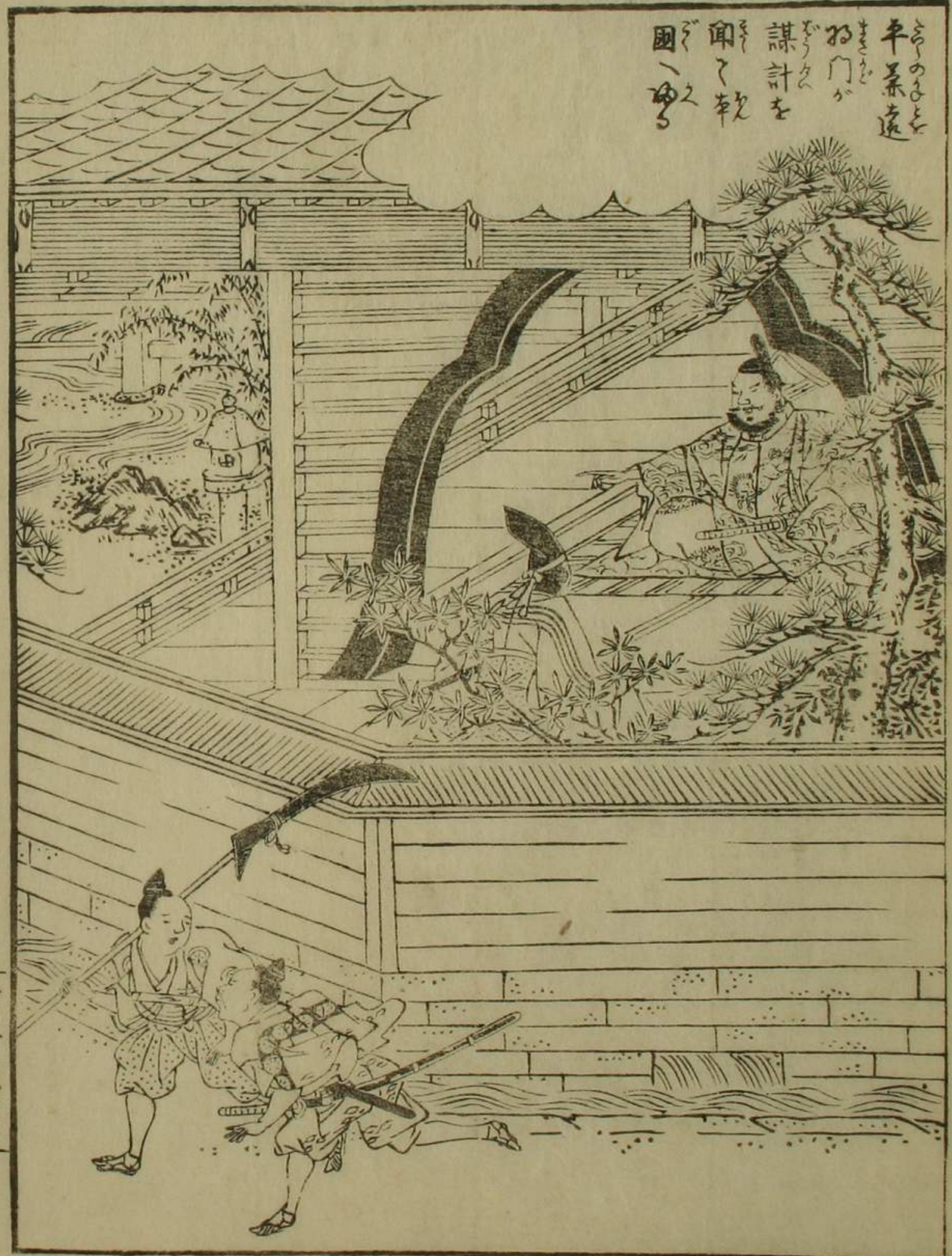
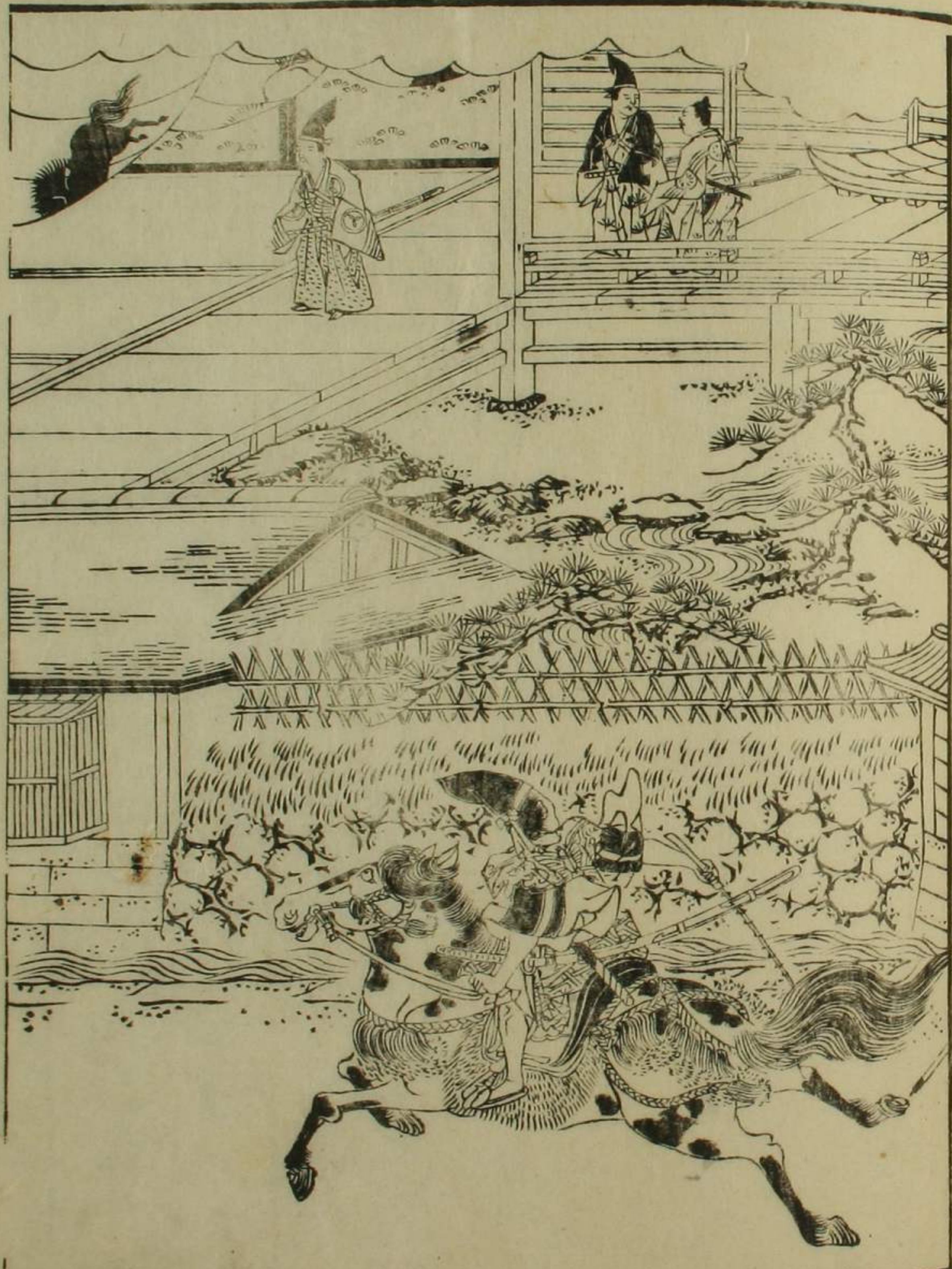
永平七年四月十八日大地おびく初月廿九日まぐ彗星見
ぬ一平くかめりて大地震相續て徳平ぬみほく説人怪瓜ぬまほりて
とみしあまのちる彗星毎秋あらまき其光月よりも夜ぬり天文博士
と肉へらまきく言ぬとらふいせらるる考すたるは秋初彗星見たる夏
皇極天皇の御宇に蘇我入麻呂のとれたとみく星あふまきしなり今に
はく二度も輝耀あるとみく一は彗にみわり其光著とれたは僕破く玉彗兵
革にまきしと赤とれたは凶賊起る國人安らば美らるとれたは女名宮瓜ぬま白とれた
お帥と叛く二年に兵乱大に起ると思とれたは水の懸はくは水江に流すく
登るは枕中今度の彗星其色白くまきしと二年と出るは内以民治と命と叛

く兵革大に起る國費民若きはくくいふを平定抑懐とまける又其海流中
に凶難と弄くしむるもく老若不別と真とらふ三月廿日大内はく十歳の
凶難ありしは七八九歳のまきしとみく時と路合が次舟にとおびに
くる門くかきしは十羽二十羽く領事と本年候とまき去儀と双く相撲場のど
くに補理く日々に乞と信據はくまみ我今眉下とく踏丸とく這き難とま
めたるは金銀と費しる業とまきまきとらみかひては化人の語と益と
とみ果は口傳國傳と及ぶは時田一及とらふ一結に易たり院に奉上聞と速
務政宣ひたるは傳聞唐の上勅とらふ逸文あり文辭と善は高宗と特士
とみ筆恩甚きとみ時法王討討と弄とみ勅師王のたに戲又文と化く英
この難と擧げもみ思く習く乞止交構の團たりとみ終は王勅と條と
叙もに寄とらふは討討と好まと殊とみ洛中の人民一人も免てとらふ則
かく停止相觸らと難とまきしとらみ放とらふは洛中とみ冷溪の門とみ天





五月廿八日
代川合戦
西番口御門
より
去り申す



平景遠
 お門が
 謀計を
 仰ぐ
 國へ

敵の楯の端をくぐりぬたりやかごとと拔けまくちて驚る真世が軍勢た
まうかの赤坂代川の白くろく本陣さく引返はすまう房さくんがよの
の流るのさ方より一面にまきくもめけりしうりも倍増く水中に溺死
まうまきかりさく又わく屋さく敵追うく海へんとさきさく急水難免はけ
はれく無勢が計ふけく三百餘騎の兵強くまかた討たさるぬ門さ
をさくくをさく真世が軍勢たさけくやとく川下とさせられたる兵
も川へ堰を合くかと返たりぬ門さく瓜を砕くせさる餘騎の軍兵急歩
海へさくぬ川さ場はさくひくもさせたり國香の軍勢はさくぬさく向
あひやんくさくあ家のねさけ二軍にあり分捕る者さく家の眉目たぬんと勇進
て敵たりぬ門其目の出さくは地地の綿の遣は衣に赤糸織の遣の裾金物繫
く打たると草摺長に下さく一金丸のさ方に懸のほの尻鞆ひさるの涙はけ
懸たる征夷若もに順さく村後原の弓のさ中極く求まらさく又さく守有る

倭奥之のまね物に白鹿輪の鞍さくせくさふたりさる陣頭にさく一矢
所かくるとさ澄んさくさくら村はさくく大もさくはくさく我は十若の白
統とさくはく自さく奇鉞さくさくさく方圓を征伐せんがぬに只今を殺せし
むるの所さくはく路瓜をさくさく進やた倭大楳國香とさんたり河叔姪の膝
をさくさくはく野津さくさくさくの糸河事さくさくさくやん瓜抱て剛さく入るの
城身をさくさく火にたぬたり其さくわさくぬさくさく川さくさくわさくさく又人強さ
十又東二伏さくさくさく引返さく強もさくさくさくさく川さくさくさくさくさくさくさくさくさく
引行國さく
さくさく國香の矢表に塞く者さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
行國が遣の楯板はく射板さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さく
さく
さく

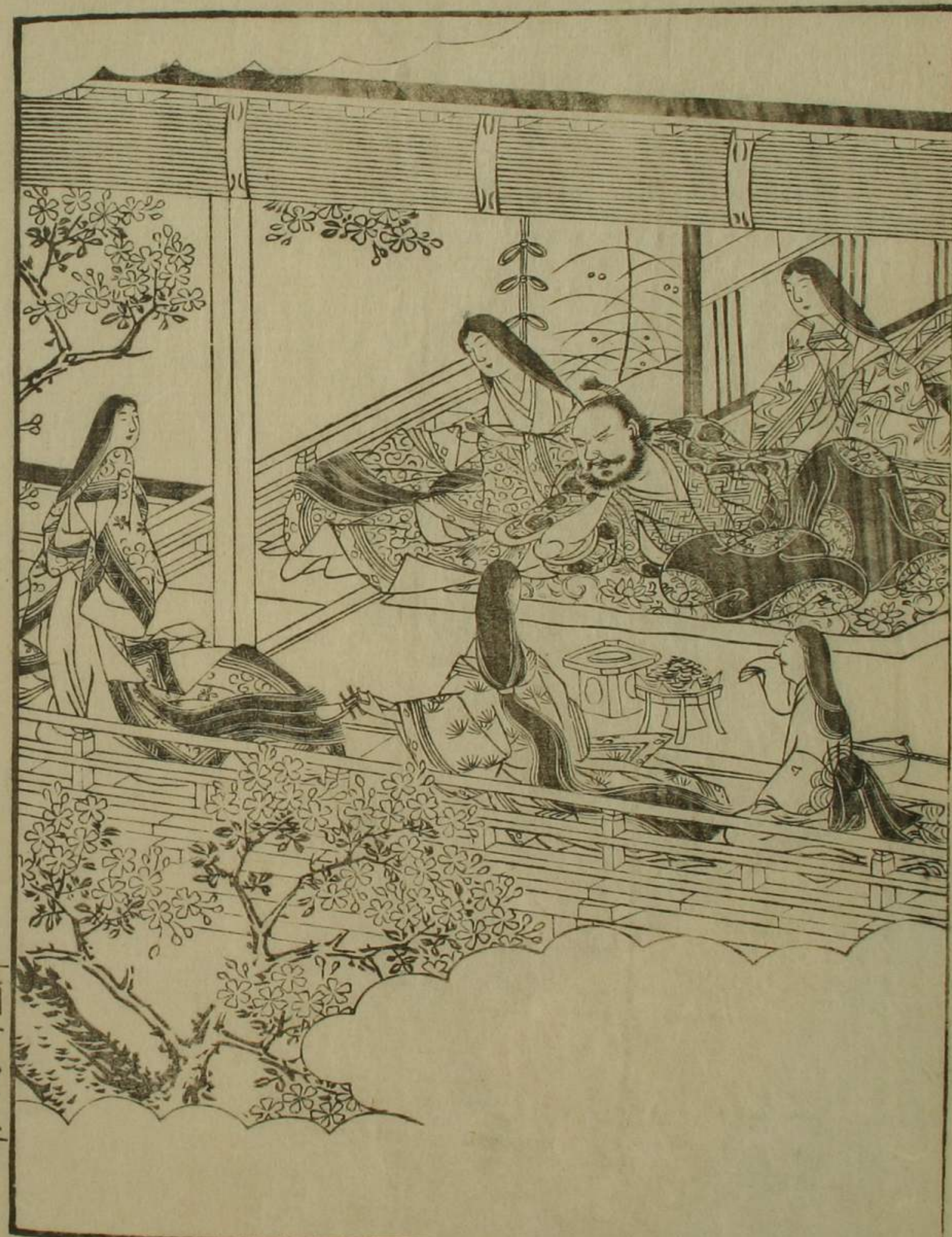


かどに被合十二萬六千條袴とを征一たるまより御門まゆらへり分懸る軍
術ハ一向と進たさるるに三枚御宴とあり入真のあまうに酒中にて酔く其目
した女と求むたあはれ何と云ふ操嫌に人々と鏡をひ取く痛みまふる酒司
我もくと人十人官を勝たす女とさるびきくもむに金襴額縁をかきとせ
翠華袋紅粉を帯ひたる妓女を瓜あそひるは赤胎を中にて後四指袖と
へ一類もの髪をむげ郵曲逸致で形勢へ蜀山阿房の宮に三千の輝燭は
あそひ郡郭旅亭の一炊に又十年の歡樂は極もかくやとさるるなり或ハ
四司の命なりとく父母の腰と引分けあふひ北頭の佐とく主婦の契をかきと
さるあやぬとまひたせたりぬ涙涙はほろろと胸を焦きし中にも襟に
こころへと吐ふは因に何某の女に幽窓にやうらまひとさるるにさるる紅顔
翠華袋の傍にさるるさるる官殿の清女なりともほのかやへあそびる幸も二八は
ぬまびぢりの夜廻姫小婢小間にもさるるおとぬ分野なりやたは日圓を村と

清に一人の男ありたりいふ形は顔見け女の貌と見たりたんとさるる化ハ
にあくがまてとや二年あはりの月日とさるるこれがかつといひさる
るよすがとさるるれ鬼やせは一角やあまの鬼にさひすたなま
を愈にさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
かくらさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
の凍もさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
のやまのさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
末までさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
ありさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
顔より一も我さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
この何某もさるるの男の寂痛さるるさるるさるるさるるさるるさるる



石門園中の
 美人婦と
 あけの月夜
 遊宴
 套後
 終



前
 一
 四
 三



箕田の
 久の六孫王
 討つて
 大迫の千
 助小
 逃げ



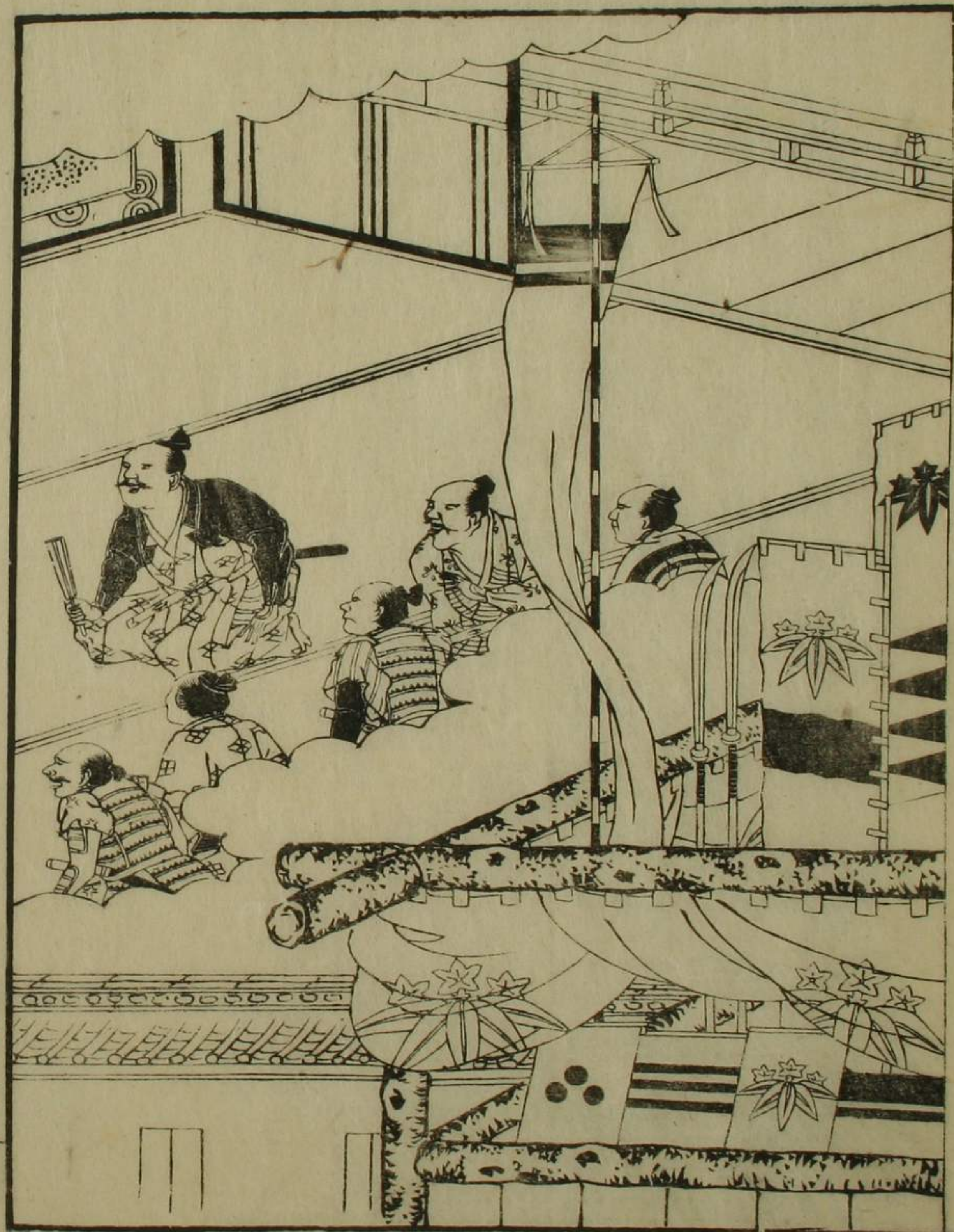
前ノ
 四十七

やうく兵どもよくなく多し半箕田にこそたれは後基王宗徒の身後を
集めてのうまひたるこそは間連日戦を度の大戦に味方の兵を命と惜
む堅固敗る利を捨てた敵とこそこそ戦を知らばこそともなる不届もせば又
大勢とて向ふとて今度の合戦千にても味方の勝利あるべうに連も
ね家にもひきまう私とねさざるに勝つて討死して思ひ我と白刃のうに敵
々寒風公美泉の下にぞんとあつらう面いともひもさこのままひ
々ま加ふるま先とてこわくやうの上まをにねいりりかゝる返く思さる
りぐ〜いれん敵のおひさのま〜こあひひ返くを返さるに敵とてりて良
おとほ〜中〜敵のたまきぬきたに一方とす勝つ美濃尾張の間に陣陣接
〜ま〜津勢とてま〜かひて初敵退治の津計思とら〜ま〜いり
後〜いり〜にける敵の軍にす勝つと敵と千里の介に返り〜と
あ〜そのあ〜いり〜人強の面〜と〜軍の多〜いり〜

と〜も寡く〜に敵と〜は事〜に勝ん〜懼と謀成好く〜す
子のま〜いり〜い〜い〜平〜に討死の義あるま〜た〜いり〜と〜はま
箕田は兵を〜勿論にいた〜敵味方のゆ美と素とらに陣方にそのの
理の〜敵に〜の失あり先敵の大敵の力を早業破れせにら〜いり〜と
い〜も〜士卒の勇に〜而もおの意にわ〜いり〜と〜いり〜と
ま〜に法方の軍にす勝つと公儀幸後〜軍に備〜ありま〜と〜又美勢と
たの〜謀を〜にせはあ〜と〜の己が武勇に勝〜と〜に士卒を懐〜は
はら法平祇に大勢あり〜と〜も多幸恩顧の希は一人も〜く〜唯あまの
槍勢に怒〜と〜辱は〜の集勢ありま〜と〜法軍〜と〜おの謀成を
て今〜と〜又志〜と〜いり〜今度あ〜に〜と〜拵〜と〜と〜腫病
神い〜と〜醒む味方を〜と〜いり〜と〜其〜と〜り又陣方の小勢ありや
と〜も〜と〜法平の希は我と〜と〜いり〜と〜命成〜と〜ま〜と〜又陣方の

法率なるをとりけりてすく大船の下知とあるも是より又け間敷日の軍次
傍にありて機とほたるもへに敵をおさるべきは是の理をのりて敵の
七の先に若く十死一生の戦とせんはさう敵と退退けりてさうさうさう
敵日の勢城はく軍兵糧をく僅に三日の糧と残せり然るに三日の理ありと
いふもを要にあらざればさう敵のよせ牙を以て敵にも及ばざりて陣
と殺されりて人さる多勢をおさるさうさう逃瓜をさるるといふは後世の
清耻辱はくいはずの敵をさるさうさうさうさう合戦く其機に際し其
要に急ド何方も清開たあらんといふと安かきさうさうと理能ぬにすさ
ささバ士率なるをとりけりてすく大船の下知とあるも是より又け間敷日の軍次
氏屋二字も残るは焼くさうさうさうの本戸より一丈一丈計は乃瓜なり其要方
はの係さ二丈一丈一丈の空を飛んて敵をさるさうさうさうさうさうさう
はくさうさうさうさうの巧なり其外望は城は敵をさるさうさうさうさう
にさうさうさうさう

ささ甘んともさうさうさうさうの本戸の勢城はく軍兵糧をく僅に三日の糧ありと
張りの精兵二十人と一絶く櫓毎にさうさうさうさうさうさうさうさうさう
旗竿と引さうさう一勢くさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
勢湯を魏さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
下知さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
んさう味方とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
て何各ん唯射捨に殺さく敵と退もゆを殺さくさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
へ甲とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
に射付きたるまを刎落させよ櫓の下にありと用さく敵を射り強よ
て折清く城はさうさうの事へ下知さうさうさうさうさうさうさう
あわさるはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



つゝけられ本々不意に秋味方とつゞきてより必承と引去成るるを多
幸朋友の既をさるるたるに似てはてはてはを加ふるをいれ然申け候今の如く食
改に又さしはも城中羊穀多くはたしひ何ヶ月田まひも根をさるる有極く
ひも今まかの花科と所先あるべきはくたにひら頭を伸く隊人に承せべく
いたひら今う骨城に大狐かけし其時十方より所務とせらるるはらさの所
もとどごとく進ぶも官易城はたつごはくひとお國の刑限はくまもくやうにひ
をいられあまのあらは城申にひらう患のたあまうとあひ居たる物さるるは
候ひまらち奉安法の所教書とるゝあ功あゝ恩赦をゆはやまこのよと要
細中合々候を返りく城申にひらは遣りたり候ひ大船をたもめ士卒ま
をさ付とらうすく赤符と付てお國の項にひらう一六陣と候わくはをを
たり十方のあまは派らるるくさや城にひらかけらるる一六陣と候わくはをを
軍勢をくは開を候わくは四方の圍を候くはも捕りたり開を城扉とよりく

つゞきられに込入るるされどもいれは秋味方も元定候は日付とぞくつゞき其
際以味方のくは人七人別と候りて虎口の秋味のがまて遠に居るのひもひら
すくはたお若知も候はくは付まは味方のあまもあかこより馳集く二百
騎に候にたり候る所に控守真世は多年の素肉をさるるは候行勢と付てあ
んもくも勢二千餘騎とせよれはけ法方分まて退かひくはさるるより正
まも秋はうらさるるものもいれは候るのさるるもさるるをさるるあひ
かへ所傍のあまより其國は二百餘と候くはと久くと鋒と候く切
くかゝる真世は勢は候易くは石姓に教れは其國勢さるるは切まらまは
け面が氣にやあまもさるるは候に候くはあまもさるるは候くはあまも
さるるは候くはあまもさるるは候くはあまもさるるは候くはあまも
もさるるは候くはあまもさるるは候くはあまもさるるは候くはあまも

秀御針將門館親相



と後頼朝の徳基王を打渡さるるも箕田城落くの後園中の兵一人も遣は
し居ざりしと云ふ事ありしに在りて改よりと評定されしに間敷日吉
軍に人をもに被せ其と今年例も法を創りしに兵を招き置きた
りたりされば當中の長途難儀ありし先物園の味方にも膝下合せ明去
早く改よりと云ふ事ありしに月廿日以下徳の大内一かく合身多と作し宗
統の一族今度軍とせし事どもに我れ頼朝の官位とさげし頼朝の御孫
身の後いふに及ばざるのすに振舞たる我れ頼朝の御孫と云ふ事ありしに下
徳押領使儀を秀郷とらふ事ありしに大藏冠より七世の孫内守村雄の
嫡男にさるるの巻をいふ事ありしに一族度より九東園に肩負ありし事
もつらりたりわす村秀郷つとぐと事案でさるる事どもに頼朝の御孫を改罪
け人氏おごりておごりしに南時官方と云ふに僅に箕田の一族ありしが是れ
落く徳基王と云ふ事ありしに館に切向く高橋の相ありや否伺ひん事あり

と頼朝の忠実に出立せ下徳に歩城門にけりし事どもに秀郷不肖の
才ありしとも幕下に列し忠節と抽し被せたる事どもに上よりいふに
頼朝の御孫に秀郷を寄位に遣はさる事ありしに例の妓女に髪梳せし居たり
しに其の御孫に礼髪せし御孫に馬帽子冠し周章強く走りかき對面
せし言の洞と云ふ事ありしに退後と云ふ事ありしに事案をいふ事どもに
秀郷をよめておごりしに種々の御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事どもに
頼朝の御孫に津料膝の上には御孫と云ふ事ありしに御孫の袖に御孫と云ふ事ありしに
てんごの御孫に御孫と云ふ事ありしに秀郷の御孫と云ふ事ありしに下徳に御孫と云ふ事ありしに
圓に御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに
いふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに
御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに
御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに
御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに御孫と云ふ事ありしに

初対面はつたいめんより公替こうかへ王おうをを使しのの下げ向むかああららむむくく珠たま罽かとと一いつ室しつがが首くび我われ
おおのの内うちにに使しのの兵へいとと僅わずかくくああ

前々平記圖會卷之一終

前二五五

